

未来をひらくこれからの高校教育について

—個を強くする学びの創造—

米谷 和也（富山県立高岡高等学校）

はじめに

国際化、情報化の進展など激動の社会情勢にあって、国は 2020 年のオリンピックイヤーに向け、高校教育・高大接続・大学教育の一体的な改革を進めることとしている。とりわけ大学入試制度改革は高校教育に大きな影響を与えるところであるが、先行きは定かでない。また、学習指導要領の改訂を通して、生徒の主体的な学びを引き出す指導方法の改善にも踏み込むとしており、教員の資質能力の一層の向上が求められるところである。

このように教育をとりまく環境が大きく変化するなかにあって、これからの高校教育がどのような方向を目指すべきか、母校明治大学の理念に通じる「個」を強くする観点から、その方向性を探ることとした。

なお、分科会では、学生のみなさんとともに主体的・対話的で深い学びを実践できるよう、ペアワークでの意見交換を基本に全体で個々の経験や考えを共有するよう配慮した。

また、母校卒業後の小・中・高等学校での教員経験や教育委員会での行政経験などを紹介しながら、実際の現場が直面している課題等についても伝えるよう努めた。

1 学校での経験を話し合うことから始めよう

学校教育が全ての生徒に有効に働いているわけではない。いじめや非行問題など、時には学校の集団に属することが大きな苦しみを生む場合がある。また、学力偏重の評価が多く、生徒に劣等感を植え付け、多様な可能性の芽を摘んでいるという現状もある。

そして私たちは、自分自身が学校で受けてきた教育や出会った先生の影響を色濃く受けている。教員になっても、良くも悪くも、それぞれの学校での経験や印象を頼りに、教員としての歩みを始めることになる。

今回は、分科会に参加した学生のみなさんが、これまでの学校生活でどのような経験をし、どのように思ってきたのか、そして、これからどのような教員になろうとしているのか、まずはペアワークで話し合い、全体で共有することから始めることにした。

<表1 ペアワークでの質問事項>

これまでの学校教育の良かったところ・改めたほうがよいと思うところ

<小学校では…>

<中学校では…>

<高等学校では…>

<大学では…>

こんな教育をしたい・こんな教師になりたい

2 「明治だからこそ」見えるものがある

ペアワークの内容を全体で共有するなか、ある学生が、「高校では国公立大学を目指す指導が強く、私立大学志望者の指導はなおざりだった」との経験を話してくれた。地方では、未だに国公立をよしとする風潮が根強く残っている。教員も地元の国公立大出身者が多く、私大は少数派である。私が教員採用試験を受けた当時は、私大の学生だけを集めた集団面接であった。面接の内容も今で言う圧迫面接で大変強い不信感を持ったことを覚えている。この最初の採用試験は、どのような問題が出題されるのかも見当もつかず、的外れな準備で失敗に終わってしまった。それから大学卒業後、玉川大学の通信教育で小学校教員免許取得に必要な単位を履修しながら採用試験に合格し、昭和57年4月、富山県公立学校教諭として採用されることになった。その後、職場では先輩に恵まれ、小学校、中学校、高校、教育委員会と勤務することになり、現在は母校の高校の校長の任にある。未だに「私大卒のくせに」と言われることがあるが、日々努力を重ねてきたし、様々な機会を与えていただいた諸先輩方に大変感謝している。

ところで、今校長として、私自身が必要とする教員は、人の気持ちが分かり、生徒や保護者、同僚とともに信頼関係を築きながら協力して仕事ができる人物である。人が人を育てるのであり、教師の良し悪しは生徒がよく見ている。

地方の教育界では、未だ明大卒は極めて少数派である。しかし、私はそれでよかったと思っている。少数派の明治だからこそ見える弱者の視点や少々のことではへこたれない粘り強さを持ち続けることができたと思う。小・中・高・行政と校種や職種が変わるたびに苦労はしたが、明治だからこそ群れることなく、謙虚にやってこれたと思う。

後輩のみなさんには、ぜひ母校明治の「権利自由 独立自治」の建学の精神、そして「個」を強くするとする大学の理念を体現し、志高く、たくましくあってほしいと、今後の活躍に大いに期待している。

3 核心はともに学び続ける姿勢

日本の公教育は、国の定める教育基本法、学校教育法、学習指導要領等に基づき、その方向性が定められている。教員は、この大前提を踏まえ、各学校の実態に応じて日々の実践を進めている。

このような大きな枠組みがあるが、日々の授業実践や個々の指導の場面においては、教員自身の取り組む姿勢や思いが成果を大きく左右する。だからこそ、公教育がどうあるべきか、教員として子どもたちとどのように向き合うべきか、自身の立ち位置をしっかりとしていくことが大切である。モンスターペアレントと言われるような保護者と出会うこともある。教育困難校と言われるような学校に勤務することもある。そのような時こそ、どう判断し、どう行動するか、教員としての真価が問われることになる。やはり個を強くしなければならないのである。

MITメディア・ラボの所長伊藤穰一氏は、変化の激しい現代は古ぼけた地図より、将来の方向性を示すコンパス、方位磁針が大事だという（「Compasses over maps」）。

ギリシアの哲人ソクラテスは、知識を切り売りするソフィストの対極にあって、「無知の知」の自覚をもとに、「より善く生きる」ことの大切さを説いた。私はこれからも、「より善く生きる」ことを大切にしていきたいと思う。教員といっても、世間知らずで、わからないことばかりである。これからの時代に必要な未来を拓くコンパスとはどのようなものか、子どもたちとともに学び、その姿を明らかにしていきたい。子どもたちを知識で圧倒しようとするのではなく、自分自身の無知を認め、ともに学び続ける喜びを共有していくところに、教育の核心に近づく糸口があるように思う。

4 校長は何をしているのか

校長は学校運営の最終責任者である。様々な課題に対して判断し、どう対応するか決定する。トップダウンだけでは学校組織は動かないが、新たな取り組みを行おうとすれば、相当のリーダーシップが必要である。抵抗勢力に屈しない覚悟が欠かせない。

以下は母校明治の大学案内の一部である。

一本学の使命（抜粋）

グローバル化が一段と進展する中で、わが国においては、明治維新や戦後改革に次ぐ「第三の開国」とも言うべき大きな質的転換が迫られています。明治大学の建学の精神「権利自由、独立自治」、そして「個」の確立が改めて、重要な意味を持つ時代といえます。

このような時代には、社会や組織の中にあっても、世界を見据えて自らの使命、役割を自覚し、他者との「連携・共生」をはかりつつも、「個」として光り輝く人材が求められています。

時代の変化や社会の要請を先取りし、未来に羽ばたく優れた人材を育成するため、そして新しい時代にふさわしい価値を見出し、世界に向けて発信するため、明治大学は、歴史と伝統に安住することなく改革を推進していくことが必要です。

「前へ」の精神を堅持しながら世界に開かれた大学を目指していきます。

※下線は追加

「伝統に安住することなく改革を進める」という強い決意とその改革を進めてきたという自負が感じ取れる心強い内容である。日本の最大規模の大学の改革には大変な苦勞があったであろうと拝察する。

各校の歴史や伝統は、学校の強みとなるが、その反面、前例踏襲の大きな弊害ともなる。

また従来成功体験が新たな改革や創造を阻む大きな抵抗勢力となり、衰退を招いた事例は人の世に事欠かない。

一般的に教員は保守的だと思う。変化を好まない集団である。高校においても、母校の「前へ」の精神を大いに見習わなければ



ばならない。私も日々、勇気を持って学校
 を変える挑戦を粘り強く続けていきたい。
 ここで折れてはいけないのである。



5 何事もやってみないとわからない … 初任校長の試行錯誤

平成 24 年 4 月、初任校長として富山県立小杉高校に赴任した。何事もやってみないとわからない。今のような時代、最終責任者としての校長はなかなか厳しい職である。

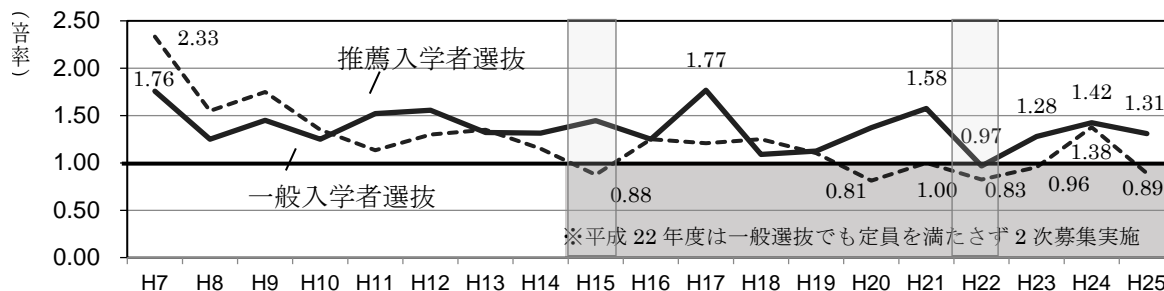
大過なくなどとはいかない。何も起こらない日のほうが少ない。時には厳しい判断に迫られることもあるが、覚悟を決めれば自分の思う学校づくりにチャレンジする醍醐味がある。私の場合は、複数の校種と職種を経験させていただいたことから、我慢強くもなったし、より幅広い観点から学校運営に取り組むことができるようになったと思っている。経験によって鍛えられ、経験が今の自分をつくっている。

以下は小杉高校での主な実践である。

(1) 生徒減少期の総合学科における選択と集中

平成 7 年度、小杉高校は国の制度改革に即して、普通科・農業科併置校から本県初の総合学科単独校へと大転換がはかられた。「幅広い選択科目から、生徒が興味関心に応じて時間割をつくる」という、高校教育の個性化・多様化の旗手としての役割を担うことになる。当初は中学生の志望も高まり、進学実績等も躍進したが、私が赴任したころには、既に熱はさめており形骸化が多く見られる状況であった。

[図 1 小杉高校入学者選抜志願倍率の推移]



ア 進路実現に向けた設置系列の改編

生徒の進路実現は、高校教育における最も重要な課題の一つである。進路実績が伴わない高校を生徒・保護者は選ばないし、地域も評価しない。小杉高校では総合学科の趣旨を生かしつつ、それぞれの進路に応じた系列の設置、教育課程の編成を進めた。教育課程は各高校における教育の設計図である。学校・学科の方向性を明

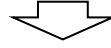
確に反映した教育課程とすることが肝要である。

[表2 系列内の枠組みの再検討]

平成22年度の改編

探究系列				技能系列		生活科学		
理工	文科	美術 5教科型	国際	体育・武道	美術	商業・情報	食物・園芸	保育・福祉

平成26年度の改編



探究系列				美術・スポーツ系列		生活・ビジネス系列		
文系		理系		美術	体育 武道	ICT ビジネス	家庭 食物	家庭 保育・福祉
英語 重視	総合	理数 重視	総合					

イ 国の実践研究を活用しての授業研究・指導力向上の推進

生徒の学びを充実させるには、教員の指導力向上、授業力向上が欠かせない。そのため、文部科学省の研究指定を受け、地元の小学校・中学校・大学等との連携を図りながら公開授業研究会等を積極的に行った。またOJTの充実を図り、高校でのアクティブラーニング導入の先導的な役割を果たすことができた。

[実践研究の概要]

ア 研究課題

基礎学力の確実な定着を図り、生徒の多様な進路実現を着実に支援する指導体制の構築

イ 授業研究における重点課題

学ぶ意欲を高め主体的な学びを引き出し、基礎的・基本的な知識・技能等の定着を図る指導の充実

既習事項の学び直しを含め、学習内容や方法、形態等を工夫することにより、生徒の興味関心を引き出し、学習に主体的に取り組ませることで基礎学力の確実な定着を促す。

[主体的な学びを引き出す好循環]



(2) 南原スピリッツの継承

小杉高校創校の父は、後に東京帝国大学総長となる南原繁である。大正8(1919)年、内務省から射水郡長として着任していた青年南原は、「郷にいながらも日本と世界の問題についても知識と教養をそなえた人間」を育てたいとの理念を持ち、学校創設を強力に推進した。その南原が好んで若者に送った言葉が「Do the nearest duty」である。この「今このときに全力を」をスクール・モットーとして、生徒の意識啓発を図ってきた。母校への愛着と自負を培いたかったのである。



6 思いもかけず母校の校長に・・・

平成27年4月、思いもかけず母校である高岡高校の校長となった。高岡高校は地方の公立高校として全国トップレベルの進学実績を誇る伝統校である。古くは松村謙三、正力松太郎、河合良成等、多くの偉大な先人を輩出してきた。

私もその卒業生ではあるが、全く生意気な生徒であった。高校の同級生は、私大出の米谷を校長にした上司が偉いと言う。そのとおりだと思うし、期待を裏切るわけにはいかない。

念のために書き記すが、私は母校明治の在野の反骨精神が好きである。田舎の進学校の卒業生ゆえに屈折した内面を引きずってきたが、今は、ぶれることなく、これまでの経験を総動員して思いっきりやればよいと思っている。前例踏襲の旧弊を打破できなければ、伝統校であれ、今の時代、未来はない。

(1) 今だからこそ「質実剛健 自主自律」

高岡高校の校風は、旧制中学の伝統を継承し「質実剛健 自主自律」である。校風を継承し、高い志を持ち、自ら学び、考え、行動する心豊かでたくましい生徒の育成を目指している。進路実績は、昭和63年3月の東京大学34名合格(現浪計)を最高に、残念ながら減少傾向にあり、昨年3月も8名と最近は二桁を割り込む年が多い。

今、私が進学実績の回復をめざし、特に課題だと考えていることは、指導体制の再構築と3年間を見通した進路指導・学力向上の推進である。また、中学校との連携を密にしての、優秀で意欲ある生徒の確保である。



課題解決は容易ではないが、今だからこそ「質実剛健 自主自律」の精神で、地道にかつ大胆に課題解決に取り組まなければならないと考えている。

おわりに

公立高校の校長として、明治大学の改革は大変素晴らしいと思う。先にも述べた通り、教員集団は保守的で変化を好まない。ましてや大学教員という個性派集団を相手に、大きく飛躍した明治大学の実績は特筆すべきものがあると思う。そして「歴史と伝統に安住することなく改革を推進していくことが必要」であるとする姿勢は、私にとっても、欠くことができない正に未来を拓くコンパスである。

今回、このような実践報告の機会を得たことを心から感謝している。関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、「前へ」の精神を支えに、これからも「個」を鍛え、足元の改革に力を尽くしていきたいと思いを新たにしている。

最後に、母校明治のますますのご発展を心から祈念申し上げ、終わりとしたい。